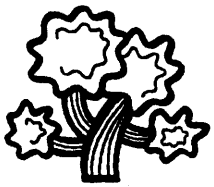
ひまわりからのメッセージ
46号
2015.1.13
西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり
発行人：中野たみ子

心の鏡



一月二日、NHKの「プレシャスブルー」という番組を見ました。これは、二木あいさんというダイバーがカリブ海で素潜りし、マッコウクジラと出会い、心を寄せ合っていく様子を映したものです。とても警戒心が強いクジラだそうですが、母クジラの後にかくれていた子クジラが母から離れて二木さんに近づいてくる様子は感動的でした。二木さんは、「この子は私の心の鏡」と言っていましたが、相手が警戒心を解いていくためには、こちらの心の動きが鍵になるということでしょう。

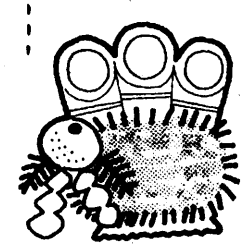
動物とのかかわりの中で心を通わせることはよく聞くことですが、私はいつも、何故人間同士が心を通わせることが難しいのだろうと思うのです。私は、人間はことばをもつが故に難しいのかもしれないと思ったりするのです。本当はかかわって欲しいのに暴言を吐く子どもたちや、「困った時は困ったと言えばいいよ」と言われても、何も言えない子どもたち。そして本当は子どものことを心配しているのに思い通りにならない子どもに苛立ち、拒否的にふるまってしまう大人など、どうしてこんなに不器用なのかと思うことが多々あります。

暴言に対して特別支援教育ネット代表の小栗先生は、「また、そんな心にもないことを言って……と対応して下さい」と言われますが、それは、「あなたの気持ちはわかってるよ」という寄り添いのことばなのではないでしょうか。

子どもたちに、教育的な訓示的なことばを出すよりも、その前に（私はあなたに寄り添っているからね、あせらなくても、怖れなくてもいいのだから……）という心が、私達には必要なのではないでしょうか。カリブ海をクジラと並んで泳ぐ二木さんを観ながら、そんなことを思いました。

新年を迎えて

希望、そして別れも……



新しい年を迎えて、早十日が過ぎました。年の始め、皆さんの元にも多くの年賀状が届いたことでしょう。

私の所にも、多くの賀状が届きますが、中でもうれしいのは、かかわった子どもたちの近況が書かれてあるものです。

「〜で働いています」。「〜の仕事をしています」という人たちや、「大学生になります」や「結婚しました」もありました。けれども、お母さんから「将来が不安です」とか「正月早々ですが、相談にのって下さい」という文面もあって、きっと私の知らないところでたくさんの親子がお困りなのだろう……と心を痛めていました。

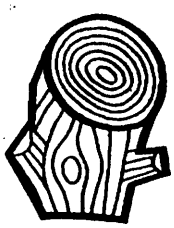
そんな正月気分の中、突然に卒園児の訃報がとびこんできました。

彼は、二歳九ケ月の時、インフルエンザ脳症にかかり、以後、長い闘病生活を送ってきました。二歳九ケ月といえば、おしゃべりできるようになり、可愛いさかりです。思い出のアルバムには、罹患する前の姿が映し出されていましたが、その時のご両親のショックはどんなものであったかと思います。ことばを失い、寝たきりの状態になりましたがその時からずっと、ご両親も家族も彼をいつくしみ、支えつづけてこられたのでした。そして、かかわった先生方も、リハビリを、遊びを、そして様々な働きかけをつづけて高等部を卒業しました。享年満十九歳。

「せめて成人式まで……と思うけど……」と、支援学校の先生がポツリとつぶやいておられましたが、でも、彼は命のかぎりを生きたのだと思います。

お父さんが「息子を誇りに思います」とおっしゃっていましたが、罹患して以来、ずっとたたかい続け、後輩に学校における医療のあり方を示し、道をつけてくれたのも彼だったということでした。命の大切さを教えてくれてありがとう。出合わせてくれてありがとう……。

自分のことは自分でできる子に・・・・。



このところ、様々な相談の中に、生活面の自立ができていないケースが目立ちます。

療育機関や保育園でも、「先生、それはやりすぎですよ」と言いたくなることもあるのですが、どう思われますか？

子どもに関わる先生は、お世話してあげたい、手をかけてあげたいなあ・・・・・と思われているので、できるだけ細部にまで気を配って下さるようです。けれども、ついつい自分の通園かばんをお母さんに持たせてしまう、鼻水をふいてもらって、その紙をお母さんが捨てにいく、ノートの出し入れをお母さんや先生にしてもらう、相談に訪れた親子の片づけは全てお母さんがやってしまうなど、当然子どもにやらせるべきことを見のがしてしまっていることってないでしょうか？　そして、先生方も無意識にナプキンをきれいにたたんで机上に置く、使ったおもちゃを先に片づけてしまう、ズボンから出ているシャツを入れてあげる等々、手をかけすぎてることはありませんか？

そんな様子を見ていてもしや家庭では汚すといやだから・・・と食事は食べさせてもらい、手や口元はふいてもらい、洋服の脱着もやってもらい、入浴は体を洗ってもらって、便もふいてもらうなんてことになっていないかと心配になってきます。

子どもの生活を自立に向けていくということは、根気のいる仕事です。食事だって、持たせたスプーンやお箸を投げられて、毎回それを拾って、又、手に握らせて・・・等とやるよりは、大人が食べさせた方が手っ取り早いに決まっています。お尻をふくことだって、大人がやればふき残しはありません。片づけもそうです。大人がやれば、早くきちんと片づけられますが、それでは、子どもは自立していきません。「やってもらうのが当り前」という子に育ってしまうかもしれません。

遠い昔、知的な発達がゆっくりな子どもたちとかかわっ

てきました。その子どもたちを自立に向けていくために、私たちは、「根気、のん気、元気」という三つの「気」をもつように先輩から教えられました。そして、そのことは、私の原点でもあります。根気づよく、何度も何度も手を取り、一緒に動かし、動きを学ばせ、生きていく力の基礎をつくっていくのです。途中で私たちがあきらめてしまったら、子どもたちはそこで止まってしまうかもしれません。「そうだよ、その調子」、「今、良かったよ」、「上手」、「がんばって」、「もうちょっと」。等々 励ましのことばや認めることばを何十回、いや何百回も口にしてきたことなどを 思い出しています。

今、発達障害の子どもたちの生活面の自立が遅れているのが気になります。幼児期に自立できていないのです。そこで出される理由とは、「感覚過敏だから……」ということばです。「砂が嫌なんです」（だから、トイレットトレーニングが出来ない？）「においが嫌なんです。だから、お尻がふけません」。（では、ずっとお母さんがお尻をふいてあげるのですか？ お母さんが死んでしまった時にはどうします？）「お風呂に一人で入れません。熱さの調節がむつかしいんです」、「学校へ一人で歩いて行けません」、「トイレに一人で行けなくて、ついて行かないとダメなんです」、等々。これらの子どもたちは、皆、幼児ではありません。知的なおくれもありません。手足も動きます。

では、何故？

答は当然、感覚の問題、あるいは心の問題ということになります。でも、本当にそうなのでしょうか？ もちろん一人ひとり、それぞれの生育歴や家庭環境がちがうわけですから、同じではないのですが「ここ」というふんばり所がきちんとされないまま、過ぎてきてしまったという印象がどうしても私には残ります。

昔、私がひまわり学園に赴任し、はじめて 脳性小児まひの子どもたちに出会ったとき、その中にTさんがいました。彼はことばを話せず車椅子の生活でした。でも左手は割に自由が残っていて、左手の小指でコミュニケーションをとっていました。小指を上げたらイエス、小指を横に動かしたらノーです。ことばは話せなくても、オセロが得意で、自分の番になると、「ここに

置いて。」と、左小指を使って場所を指定するのです。そして、いつも私は負かされてしまうのです。ダイヤブロックで戦艦や飛行機も見事に作り上げるので、いつも驚ろかされました。「これを、ここへ」という指示に従って組み立てていくと、私たちの想像をはるかに越えた作品が出来上がるのです。Tさんは中学生でしたが、食事も着脱も全介助でした。その彼が、夏休みに電動車椅子に挑戦すると主張してゆずりません。私たちは、出来るはずがないと思い、「無理しなくても…」と口々に言うのですが、ついに根負けして「じゃあ、貸してもらってやってみたら…」ということになりました。一ヶ月後、彼は、左手で操作して、みごとに乗れるようになっていました。

そして冬休み、「ジャンパーを二時間かけて一人で着たんです。手伝おうとすると怒るので放っておいたのですが…。」と、お母さんからの報告がありました。

不随意運動があり、自分の意思で止めようとしても止まらない体の動きに、彼は挑戦しつづけたのです。本当にTさんに、私は多くのことを学ばせてもらいました。

あきらめないこと、挑戦しつづけることもTさんから学ばせてもらったのです。

では、翻って考えてみた時に、前述のような子どもたちが、本当に努力を積み重ねてきたでしょうか。お尻がふけないお子さんに、まずお風呂でお尻を流すこと、体を洗うことから始めてみましたか。砂がいやという感覚は、感覚の快、不快ということであって、過敏性とは違うかもしれないとは考えられなかったでしょうか。トイレに一人で行けないのは、何故でしょう。学校へ一人で行けないのはどうしてでしょう。もしかしたら「一人で行かなくちゃダメ！」と背中を押されたために、よけいに気持ちがついていかなくなってしまったのではないでしょうか。最初はついて行くということから始めて、少しずつ「今日はここで見ててあげるから、大丈夫」。それができたら、また、ほんの少しずつ距離をあけて見守っていくというスモールステップを教えてくれた人は誰もいなかったのでしょうか。親さんが不安で仕方がなかったというようなことはなかったでしょうか。（お母さんの心の揺れは子どもの心に反映するのです。）

私は、お母さんをせめているのではないのです。それよりも、もっと早くに相談にのれていたら、よかったのにと思うのです。一緒に考えることができたのに……と悔やまれるのです。

親切すぎてしまうお母さんや先生にも、どんなふうに対応したらいいか、アドバイスできたらいいなあと思うのです。

もちろん、どんなに努力しても、機能的にもむつかしい子もいます。「自分のことは自分で…」とはいかないでしょう。当然それは、皆に助けてもらえばいいことです。人に助けてもらうことが恥ずかしいことでも何でもありません。

お分かりいただけるでしょうか。

家庭での生活を、今一度見直してみませんか？、幼児さんは、食事や着脱や排泄、手洗い、あいさつなどを見直してみましょう。小学生なら、自分の食器は流しまでもっていきますか？、「お茶！」などと言って、お母さんを召し使いにしていませんか？、家庭の中で、お子さんに決められた仕事はありますか？、爪は自分で切れますか？、

子どもたちは、大人とちがって一日一日、あっという間に大きくなっていきます。ほんのちょっとずつの積み上げがとっても大事ですね。

お知らせ

◎一月から、大垣では、小→中学校へ、二月、三月には幼→小学校への引きつぎ会が始まります。スマイルブック（サポートブック）をもつ子どもたちも増えてきました。皆で子どもたちを支えていく体制づくりが進んでいくといいですね。

◎岐阜県では、平成二十七年度からの障がい者の支援についての策定プランが進んでいます。年令に関係なく、障がいの有無に関係なく、皆が当たりまえに地域で生きていけるように、早くなってほしいものです。

◎二月のセンター親の会は十日（火）です。